



2024年8月14日～17日にインドネシア・ジョクジャカルタにて開催された WASLI アジア手話通訳者会議への参加を可能にいただいた資金援助に関し、全国手話通訳問題研究会に深く感謝申し上げます。

この経験は豊かで多様性にあふれるものとなりました。15カ国から集まった通訳者との出会いも学びが多く刺激的でした。ろう者、きこえる人、46人の通訳者という小人数の集まりだったため、共に過ごした4日間を通してより仲間意識が強まりました。

WASLI アジア地域代表である宮澤典子氏の暖かい歓迎の言葉で2日間のイベントが始まり、まず WASLI 会長のクリストファー・ストーン氏の挨拶がありました。とても勇気づけられる呼びかけで、知識や経験の共有を通じた専門性の向上のために、ろう協会と通訳者組織の強力な友好と協働の形成や、通訳者協会未設立の国に対する組織設立を通じた支援、実り多き議論、組織構成や新しいイニシアチブ、紛争解決、ろうの通訳者とのチームワーク、公平な報酬、その他の情報共有など、このような地域内での努力の積み重ねが2027年に開催される UAE（アラブ首長国連邦）での WASLI 会議でより大きな審議へとつながります。

1日目、宮澤氏の司会により、基調講演の後 ISAAB（国際手話通訳認定委員会）メンバーであるアルゼンチンのファン・デュルエッタ氏が WFD と WASLI の IS 通訳者認定に関する幅広いディスカッションを行いました。また、ろうの通訳者として必要な基準や技術、きこえる通訳者がフィーダーとして円滑な連携通訳を促すために必要な資格と技術についての説明もありました。さらに、音声言語と手話の強化、専門的通訳技術の向上、またそれぞれの文化についての橋渡しとなる重要性について訴えました。そしてデュルエッタ氏の通訳としての経験や、正確で効率的な通訳のためのチームワークや一体感の必要性についても語りました。その上でろうの通訳者がいかに字幕や事前準備、メモなどの活用も含め、フィーダーからの情報を効果的に利用するかのコツを披露しました。この講演は残り2日間の方向性を印象付けるものとなりました。

次のセッションは、PNASLI（フィリピン）、KASLI（韓国）、JASLI（日本）から各代表者によるパネルディスカッションで、ルーシー・リム氏の司会により進められました。

ジョン・ザンドレ・バリザ氏は、2016年のフィリピン手話言語法施行後、デ・ラ・サール聖ベニル

デ大学で手話通訳学科の学士課程を指導し、通訳者養成プログラムとは別の、通訳者としての即戦力の確保に関するフィリピンでの先駆的な取り組みを紹介しました。FSL 法の実施におけるフィリピン言語委員会とともに活動を続けている3つの全国的通訳者組織が全国通訳調整ネットワーク (National Coordination Network for Interpreting) を通じて協働していました。WASLI の指導のもと、国際的な専門家を通じてこのプログラムは進行中であり、カリキュラム作成や講義など参加者の指導に対して支援を受けています。

次は韓国の通訳者の社会的地位について、1997年から始まった非公式の手話通訳者資格について紹介がありました。現在までに20回、国が認めた民間手話通訳者認定試験が実施され、2023年時点で15,000人の応募に対し1,927人の合格通訳者がいます。専門的な通訳者養成施設を韓国ろう者協会と共に2009年に9都市に設立し、有償プログラムの実技(韓国語と手話技術)、筆記試験(障害者福祉、ろうコミュニティとろう文化、手話通訳の基礎)において60点以上を獲得した者に対して通訳候補者としての国認定の民間資格IDカードを発行しています。また、韓国ろう者協会も同様の試験でろう通訳者に対する非認定民間資格を開始しています。

韓国には全国に195ものセンターがあり、ろう者に対して公的情報、健康、医療サービス、福祉や相談窓口、ビデオリレーサービスなどを提供しているとのことで、大変驚きました。KASLIに関する情報も共有されています。KASLIには聞こえる会員155名、ろう者会員134名がおり、多くの定期的な活動や協働プログラムが開催されています。

ディスカッションの最後には、日本からの情報として、手話通訳者の養成・資格制度や社会的地位について紹介されました。日本では手話奉仕員・通訳者養成制度が厚生労働省の管轄であり、80時間の奉仕員養成を修了した人を対象に、90時間の手話通訳者養成プログラムが用意され、カリキュラムが提供されています。毎年実施される試験に合格した通訳者は、一定の支払基準を満たした報酬を得られる有資格通訳者として登録し、活動することができます。また、所定の研修を受けて、政見放送の通訳に当たる通訳者は、5年ごとに再研修を受ける必要があるなど、監視のための規定が設けられています。課題は、若い世代がこの職業に就いていないこと、有資格通訳者の年齢層が40歳以上であることのようにです。

450万人の手話ユーザーを含む1,800万人のろう者にアクセシビリティサービスを提供している認定通訳者がわずか500人しかないインドの現状と比較して、3カ国の通訳者の社会的地位やトレーニングプログラムを理解することは非常に役に立ちました。訓練を受けた有能な通訳者を育成するために、ASLIインドがインドろう協会とともに何ができるか、さらに考えさせられました。ディスカッションでは、HI(聴通訳者)とDI(ろうの通訳者)のチームワークのレベルや、DIの意思決定への関与の度合い、知名度、聴者の関係者との協議、特にコンサートや音楽・演劇イベントの通訳においてDIに必要な準備など、参加者からいくつかの質問が出され、質疑応答に移りました。通訳者とともに、彼らの国や環境での仕事を理解する時間を持てたことは、私にとって目を見張る

ものがありました。より親密なサークルであったため、十分とは言えないものの、生産的に交流し、関わることができました。

2日目の議題は、JUPEBIM (マレーシア)、AJBII (インドネシア)、ASLI (インド) によるパネルディスカッションで、それぞれの国での通訳組織の立ち上げについて報告されました。

ASLI インドの会長として、この国際的な場でマレーシアとインドネシアの代表と同じ場で、組織化の必要性と目的、ビジョンと目標、会員構成、ガバナンスとリーダーシップ、プログラムとサービス、コラボレーションとアウトリーチ、資金調達と持続可能性、評価と改善、課題と解決策などの情報を提供できたことを光栄に思います。

ここでは、ASLI の歴史と現在の活動を要約します：

ASLI は 2007 年、ろう者と聴者が理事を務める登録団体として設立されました。手話通訳者に特化した協会の主な必要性は、専門的な基準の確保、通訳者の権利と認知の擁護、継続的な教育の提供、協力的なコミュニティの育成です。このような団体は、職業を強化し、ろう者や難聴者のコミュニティに提供されるサービスの質を高めます。ASLI は当初 5~8 年間、まさにそのような活動を行ってきました。まず取り組んだ仕事は通訳者を見つけることで、次に適切な分担をしてくれる理事を見つけ、その後主にコーダや当時の会員の要請に移っていきました。

私たちの組織は、よく言えば無関心、悪く言えば敵対的な環境の中で、通訳者とろう者をサポートしてきました。グループ指導と問題解決は、私たちが行う重要な機能です。

私たちは、専門能力開発、ネットワークの機会、リソースへのアクセス、公正賃金のアドボカシーといった重要な特典を提供しています。これらの特典は、メンバーのスキルを高め、職業上のつながりを広げ、仕事の満足度を向上させ、通訳者のより強力で統一されたコミュニティへと導き、キャリアの成長と雇用の安定にプラスの影響を与えます。

当協会は、意思決定にろう者や難聴者を積極的に参加させ、アクセシビリティの権利を擁護し、通訳者の文化的能力を確保することで、ろう者や難聴者コミュニティの幅広いニーズと目標を一致させています。通訳サービスの高水準化を推進し、継続的な教育を提供し、ろう者のコミュニティに利益をもたらす法制化にかかわる取り組みを支援することで、通訳者と通訳者利用者との関係を強固なものにし、信頼と相互尊重を育み、最終的にコミュニケーションとインクルージョンを向上させています。

インドには、インドリハビリテーション評議会 (Rehabilitation Council of India) の 2 年間の通訳訓練ディプロマコースがありますが、分野別の訓練はありません。ASLI は、継続的な専門能力開発として、様々なトピックに関する各分野の専門家を招いてウェビナーやパネルディスカッションを実施しています。

私たちは Terp Talks- 「Kaam ki baat」 (カーム・キ・バート) と呼ばれるオープン・ディスカッションの場を設けています。通訳者はそれぞれ仕事や生活でとても忙しく、通訳のスキルアップのためには時間を作り学ばなければいけないことを理解してもらうにはかなりの時間がかかります。そ

して、その成長は学習の有無によって左右されるのです。

ASLI は過去 17 年間に 5 回の全国集会を開催し、135 名の会員がおり、その数は毎月増加しています。私たちの目標は、これからの 通訳者を支援し強化することです。年会費は 500₹ (約 6 米ドル≒940 円) で、会員には ID カードが発行されます。

ろう者通訳はインドにとってかなり新しいジャンルですが、これまでの機会を通じて、ISL と ASL、BSL、IS の手話通訳ができる優れたろう者がいます。私たちは、インドでもっと多くのろう通訳者を確保したいと考えています。そのために企業や市民団体のクライアントの基盤を確立し、ろう者の通訳利用促進や、通訳者の学習の機会の保障、生計を向上させる機会の提供に取り組んでいます。ASLI は、インドの首都にある高等裁判所が手話通訳を認可したように、司法の分野でもいくつかの大きな成果を上げています。ASLI は、ろう者に聞き取り調査を行い、政府機関を通じて報酬が支払われます。これは国内初であり、他の州もこのモデルを再現しようとしているところです。ASLI は、15 年以上にわたって政府と密接に連携してきた経験から、この活動に大きく貢献してきました。

一方、インドネシアはまだ新しい組織であり、いくつかの啓発活動を行ってきましたが、現在いくつかの課題に直面しているとのこと。ろう者のアクセシビリティに対する地域社会の認識不足とろう者の専門的な資格取得の必要性などです。ろう者には多くのアクセシビリティ・ニーズがあり、そこでは専門的な資格制度と、講師として多くの手話通訳者が働いています。話を聞く中で、しっかりとした組織作りや協力体制、カリキュラムの共有など、通訳業務や指導を行う人々のために、私たちが提供できることがたくさんあると感じました。

JUPEBIM (マレーシア) は、多くの専門家の指導を受け、研修の開催や、国や州を挙げてのイベントへの情報提供など、様々な活動や国際機関との連携を通じて、通訳者を育成しています。しかし、彼らはろう者ときこえる人の協同作業におけるスキルアップや課題に対する消極的な場面も経験しており、専門職としてのしっかりと議論し理解を得ようとしているとのこと。

最後の 2 つのディスカッションでは、ISLIA (インド手話通訳者協会) による手話通訳者の倫理に関する簡単なプレゼンテーションが行われました。また、A～Z の倫理規定が、ろう者の専門家によってインド手話に翻訳され、参考資料として関係者に提供されました。

2 日目の最終日は、今後の進め方についてのセッションでした。

地域ごとのグループに分かれ、各グループの上位 3 つについての幅広い議論が行われました。早急に取り組むべき通訳の課題・ニーズを 3 つと、2027 年までに WASLI アジアに提案すべき 3 つの活動、WASLI アジアで私たちのグループがどのような支援ができるかを検討しました。

インド、ネパール、スリランカ、モルディブで構成される南アジア・グループでは、ITP を立ち上げ、協会の存在価値、会員組織を確立しているようでした。これらに取り組んでいる他の国々をサポートをしたいという申し出もあり、WASLI アジア会議をネパールかインドで開催し、情報交換の

ために定期的に WASLI アジア会議を開きたいという提案もありました。

会議は、閉会の挨拶と 2 日間のワークショップの総括、そしてお礼の言葉で幕を閉じました。最後のガラディナーはとても素晴らしく、参加者はパフォーマンスに魅了され、WFD RSA（世界ろう連盟アジア地域事務局）代表と交流するなど特別な夜となりました。

広い知見を得ることのできた貴重な経験を持ち帰ることができました。WASLI アジア通訳者会議に参加する機会を与えてくれた NRASLI（全通研）に心から感謝しています。今後、私は IS コースを受講し、2025 年 7 月までに IS でスムーズな会話ができるように練習に励みます。

心からの感謝を込めて

Dr.レヌカ・ラメシャン

ASLI インド会長